閉会挨拶

稲葉　光行

最後に私からごあいさつとコメントをさせていただいて、終了とさせていただきたいと思います。

このプロジェクトでは、私自身が直接研究に携わるというよりは、基本的に先生方と実務家の皆さまの橋渡し、それこそ対人支援に取り組んでまいりました。

その過程で、先生方から個別の活動を伺う機会はありましたが、プロジェクト全体としてまとめて知る機会は必ずしも多くなかったので、本日の研究会で一通りお伺いして、全体像をつかむことができました。その上で、いろいろなチームで多様なことに取り組んでおられ、それぞれかなり進展があるという状況を拝見して、大変うれしく思いました。

また本日、先生方や実務家の皆さま方のご発表をお伺いして、皆さまが、研究者、あるいは実務家である以前に、「人間として」いろいろな社会問題に対して自ら動いて解決しようとしておられるということに感銘を受けました。昔ケネディ大統領が大統領に就任したときに、「アクティブ・シチズン」という言葉を使って、「その国が何をしてくれるかを考えるのではなくて、自分が国のために何ができるのか考えてください」と伝えましたが、このアクティブ・シチズンの考え方を、プロジェクトの先生方や、関係する実務家の皆さま方が実践されていることを知って、大変感銘を受けました。

「インクルーシブ社会の実現」というのは非常に長いスパンで取り組むべき課題だと思いますけれども、少なくとも立命館大学でアクティブ・シチズンとして動いている先生方、実務家の方々が、日本の近隣を変え、さらに日本を良くする活動を行い、そのノウハウをまた海外に持っていって、国際的な問題を

解決していくことができれば、インクルーシブ社会の実現に着実に近づいていくことができるのではないかと思っております。

プロジェクトとしては残り１年ではありますが、我々は、今後国内のみならず、国際展開に向けて、またインクルーシブ社会の実現に向けて努力してまいりたいと思いますので、皆さまのご支援、ご指導、叱咤激励をいただければと思っております。

最後になりましたが、本日、ご登壇いただいた先生方・実務家の方々、積極的に議論にご参加いただいたフロアの皆さま、コメントをいただいた泉さま、スタッフの皆さま方、本当にどうもありがとうございました。引き続き、ご支援、ご指導、ご援助をよろしくお願い致します。本日はどうもありがとうございました。